

## 家政学における典型研究法の意義(1)

—その視点—

○金田利子※ 岸端康代※ 森圭代※ (\* 静岡大)

目的：家政学の特性は、総合性と実践性に求められてきた。しかし、その理念がどれだけ具体的研究に具現化されてきたかと問うて見たとき、必ずしも十分に探求されてきているとはいえないように思われる。それは何故か、誰に問うのかを考察してみる必要がある。調査においても、ランダム抽出法では、一般の傾向はでるが、ではどうしていけばよいのかという、一人一人の実践的課題と結びつけるのは、そこにもう一つの研究が必要になってくる。ここでは、生活者としての総合性・実践性のある研究には、「典型に問う」という研究法が不可欠なのではないかということ具体的研究をもとに提案したい。

方法：(1)では、これまで、最も厳しい状況にある家族や子どもの発達状況をややもすると例外としてとらえられてきている向きもあるように思われるが、それを、単に例外ではなく、「本質的な矛盾の結節点」としてとらえ直すことはできないか。そこから導いた法則が多くの人々の生活に活用していける原則が引き出せないかなど、典型研究法の先行研究にあたりつつ、家政学における典型研究法の不可欠性について、その視点を考察する。(2)(3)においては、それぞれ具体的な典型に問う研究について報告する。

結果と考察：親としての発達を障害を持つ子の親を典型としてみた研究、及び保育問題の実態を認可外保育所に預けている親の声を典型としてみた研究から、今後検討していくべき課題とともに、「客観世界の発展(すべての人の平等・人権・参画・共生等)の線にそった本質的な矛盾の結節点」としての問題が明らかになり、人々の実践的課題が見いだしやすいということが示唆された。